



残暑厳しいお盆明けの一日、緑豊かな田園が広がる亀岡市を訪ねました。Steven McGreevy 准教授が主宰する「持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールド」研究プロジェクトの一環で、地球研と亀岡市の包括的な学術交流協定を締結するためでした。元気な桂川市長との調印式を済ませた後、このプロジェクトのメンバーである日本クルベジ(Cool Vegetable)協会代表理事の柴田晃さんに案内していただき、この協会が進めている太陽光発電と野菜作りを組み合わせた新しい試みの現場を訪ねました。

広大な野菜畑の真ん中の 100m x 70m 四方の面積に、太陽光パネルが 2 m 程度の高さに屋根のように広がり、その下では、アスパラガスやキャベツなどの野菜作りがそのまま行われていました。7月にこの実験は開始されたばかりです。(京都新聞 2016 年 8 月 16 日の記事参照)「えっ、太陽光パネルの下で野菜ができるの？」という疑問がすぐ出てきますね。日陰では野菜は育たないという懸念や、そもそも農作地でのパネル設置はダメとする農業行政関係者の反対で、畑での太陽光パネル設置の許可をもらうのは、大変だったようです。

鉄パイプの支柱で組み立てたパネル屋根は、かなり隙間があり、太陽光はある程度入るようにはなっていますが、野菜の育成のためには、直達日射も大事ですが空からの散乱光も大事です。(曇っているのに物が見えるのは、この散乱光のおかげです。) パネル屋根の下にも、散乱光は十分入ってくるので、野菜の葉っぱでの光合成は十分できるというわけです。パネルの下は、風通しも良く、葉面の温度もあまり上がらないので、夏はむしろ光合成の効率は良いのかもしれませんが。私はかつて調査した中国雲南省や海南島で、ゴム林の林間に茶を栽培している農業のあることを思い出しました。日差しの強い亜熱帯では、積極的に日陰を作って茶の栽培をしているのです。

もちろん、まだまだ課題もあり、たとえば「(日射が弱くなり気温も下がる日本の) 冬は問題でしょう。」と柴田さん。日本クルベジ協会は、大気中の CO2 削減にも貢献する炭素埋立農法による野菜作りを進めている団体ですが、太陽光発電により畑の傍で稼働できる大型冷蔵庫を置き、そこに出来立ての野菜を保存させ、スーパーなどに適宜出荷することにも使えるとのこと。何よりも、農家にとっては、広大な畑を利用した発電の収入により、農業そのものが安定的に行えるという大きなメリットがあるわけです。

一方で、緑の畑に太陽光パネルは、景観を損ねるのではないかと、という声もあります。確かに、畑地が太陽光パネルに埋め尽くされたとしたら、これまでの田園風景とはかなり異なってしまいます。しかし、この方式の導入により、現在は非常に苦しく不安定なこの地域の農業経営が安定化し、(環境負荷もなく) 持続可能となるかもしれません。皆さんはどう思われますか? この問題は、「そもそも(よい) 景観(風景)とは何か?」という問いを、私たちに投げかけています。地球研にも滞在された哲学者・地理学者のオギュスタン・ベルクさんは、「日本の風景・西欧の景観—そして造景の時代」(講談社現代新書、1990) で、まさに、自然と文化に関わるこの問題を議論されています。今年度も来られる予定ですので、ぜひ彼も交えて、現地の方々や関係者とこの問題を議論してみたいですね。